

シラーの『オルレアンの乙女』について 3.

江坂哲也

承前

同タイトル 1. (「日本福祉大学研究紀要 現代と文化」第124号, S. 1-26. 掲載)

ヴォルテールとシラーの「乙女」の意味

歴史と文学作品の関係

神の声, 第一の3種の神器

太子の仮宮殿では

同タイトル 2. (「日本福祉大学研究紀要 現代と文化」第125号, S. 1-25. 掲載)

第二, 三の神器

魔女の出現

人間モントゴメリの声と神々の声

ブルグントの翻意とフランスの統一

和解の後に、栄誉の授与など世俗からの誘惑

第2幕が下り、次の幕へと続く。清純な乙女ヨハンナと共に戦場で敵と戦っているうちに、太子側の主要な騎士であるデュノワとラ・イールの心に、彼女に対する恋心が芽生えたようである。第3幕第1場では、この二人によってヨハンナ一人を巡る権利争いの口火が切られる。

デュノワ： 我らは心の友であり、戦場では兄弟で、

その件では共に腕を振るい、

危険や死を前にして、共に組んでやって来た。

共に運命の転変に耐えて来たこれまでの

1815

この絆は、女への愛のことで切らんでくれよ。

ラ・イール： 御前、私の言い分もお聞きのほどを。

デュノワ： お前がああ素晴らしい娘を愛していることも、
何を考えているかも、わたしにはよく分かっているぞ。
その足で国王のもとに馳せ参じ、あの乙女を贈り物として
下さるようお願い出ようと思っているのだろう、— お前の勇敢な 1820
武勲に相応しいその褒美を、王とて断れまい。
だが良いか、— わしはな、彼女が他の男の腕に抱かれているの
を見るくらいなら、—

この二人の乙女に対する恋愛感情は確かであるにしても、彼女を武勲に対する「贈りもの」(Geschenk) としてもらうとか、「褒美」(Preis) としてやるとかは、古代ギリシアの英雄叙事詩の世界のことであろう。それも戦利品としての宝物とか奴隷ならともかく、さらにこの舞台はそれよりはるか後の中世で、ヨハンナは寒村に生まれた領民とは言え、れっきとした同国のフランス人で、しかも神の遣いと見なされている乙女である。だがこの劇の舞台となっている中世では領主は領民に対して初夜権を持っていたという事実、そしてシラーの時代では臣下の結婚は公的なもので、例えば老ゲーテが1823年19歳のウルリーケ(Ulrike von Levetzow 1804-99)に求婚する際にはヴァイマル宮廷から公の使者が遣わされるのが習わしであったことを考慮すると、少なくとも太子の士官であるラ・イールは願い出て、許可を得なければならないと言うことだけは作者の時代背景と一致していよう。シラーはこれまで皇太后イザボという色狂いの「性女」、そして太子カールと愛人アグネスの相思相愛を描いてきたが、さらなる愛と結婚の形態を盛り込んで、在るべきそれを追求しようとしているのであろうか。

ところで、「他の男の腕に抱かれているのを見るくらいなら、—」と言うこの最後の台詞は、デュノワの彼女に寄せる思いの真実をよく表しているが、公的には穏当と言えない。父を殺されたという私怨で敵対していたブルグントとフランス太子の間で和睦の儀が執り行われようとしている矢先に、新しい種類の不和の火種ができてしまった訳である。デュノワはラ・イールに耳も貸さず、彼女への思いの正当性をまくし立てる。彼のこれまでの女性遍歴は見た目の「欲情」(Lust, 1825) からだけで、彼の「心」(Sinn, 1826) を虜にした女は一人としてなかったが、神がヨハンナをフランスの救世主(Retterin, 1829)として遣わし、こうして会わせてくれたのだから、神が彼女を自分の女に定めてくれたのだと勝手に解釈し、彼女のような強い女はわしのような猛者にこそ相応しく、わしの「燃えるような心は、この力をしっかり受け止めることのできる相応しい胸に安らぎたいと憧れるのだ」(1833f.)と言う。つまり彼女のような強い女はデュノワのような猛者に相応しいのであって、ラ・イールのような若輩は控えておれ、と言うことであろう。すると一介の将官でしかないそのライバルは恋敵であるこの男爵の弱点をとらえ、「身分の低い羊飼いの女が妻としてあなたの傍に立つことはできません、あなたの血管を流れる王族の血がこんなにも卑しい血と交るのを拒みましょうから」(1840f.)と反論し、「国王に決めていただく」(1856)と提案する。これに対し、デュノワは確かにオルレアン公を父とし、自らも

男爵位を持つ王族であるが、自分が庶出であるということを利用して、彼女も自分と同じ「聖なる自然の神々の子」(das Götterkind der heiligen Natur, 1844f.), すなわち自然な男女によって創られた自然物であると同列視する。そして、それゆえ彼女の頭には自然という「神々の輝き」(Götterschein, 1848) が位階というこの「地上の王冠」(irdische Kronen, 1849) より明るく輝いているのだから、どちらを選ぶかは彼女自身だと主張する。ラ・イールは現実主義者で、位階の頂点に立つ王ならそれを考慮して裁定を下すだろうから、自分が有利になるだろうと考えているのだろうか。その彼に対してデュノワは自然を賛美するロマンチストのように感じられるが、この二人の恋の行方は、清純な乙女ヨハンナが旧約の神と聖母マリアから命じられた「この世の愛を受け入れてはいけない」(Vgl. 411f., 1089.) という恋愛禁止の戒律を守る聖女である限り、片思いで終わろう。

第2場はブルグント公がカール太子を自分の仕える国王として認め、供の者を引き連れ、和睦の挨拶のため来訪するのを迎える場で始まる。カールの愛人ソレルは「喜びと平和、そして和解」(1868) をもたらしてくれるこの日を率直に喜んでいる。ブルグントの使者が先触れとして参上し、出迎えの際の条件を願い、一つを除いてカールは喜んで承諾する。その一つとは、あの不和を引き起こした原因を作った張本人をこの歓迎の場から排除するようと言うもので、それが仄めかされただけで、カールに仕えながら心の友でもあるデュ・シャテルはみずから黙って出て行こうとする。カールは「行ってくれ、デュ・シャテル。公爵がお前を見ても、我慢できるようになるまで、隠れていてくれ」(1895f.) と頼みながらも、その出て行く彼の後をすぐ追い、主従を越えた友人として抱擁し、そして下がらせる。個人としてのカールは友である彼をこの場から去らせたくないが、ブルグントが父の仇打ちという個人的なものをさて置いて、フランスの統一という大義に就こうとしているのだから、その彼の私的怨念を思い出させるような人物をこの場から遠ざけるようにという和睦条件は飲まざるをえず、これは個人と公人という二面を持った彼の苦渋の選択である。

さて、ブルグント公が到着し、太子は彼を、彼も太子を抱き、二人はともに胸と胸を合わせ、これまでの不幸を水に流し、同じフランス人として抱擁する。その二人に割って入って、大司教が、

あなた方は一つになられた。これでフランスは新しく

フェニックスのように蘇るでしょうが、

1993

(中略)

お二人の不和のため犠牲になって戦死した無数の者たち、

この死者たちは蘇りませんぞ。お二人の争いのため、多くの

2000

涙が流されましたが、これからも流し続けられるのですぞ。

生まれ来る次の世代は花と栄えるでしょうが、

逝った世代は、お二人の浅ましさが葬ったのですぞ。

孫たちは幸運に恵まれても、その祖先は蘇ることはない。

これがお二人の兄弟げんかの結果なのだ！ 2005
(中略)

今日は雲上の方から、ちょうど良い時期に、救いの手が 2012
差し伸べられましたが、もう二度とこんなことはありませんぞ。

この「救いの手」(2012)という言葉で、この日をもたらした最大の功労者ヨハンナがいないのに皆は気づき、探しだそうとしている所に彼女は登場し、喜び迎えたブルグントに彼女は、「心からの和解でなければ、完全とは言えません。この祝宴の杯に、憎しみの一滴でも残っていれば、毒杯になります」(2045f.)など見事な弁舌を駆使し、ブルグントに私怨を克服させ、デュ・シャテルとも和解させてしまう。

カールは自分にできなかったこの難題までも解決してくれた彼女に、これまでの業績に感謝して、「どう礼をしたら良いか言ってくれ」(2084)と命ずると、

ヨハンナ： 幸運に恵まれていても、不幸の中でそうあったように、 2085
いつも人間的であって下さい。— 絶頂の時でも、困窮の時に
一人の友が担った苦悩をお忘れないように。それを
あなたはどん底でお知りになりましたわね。正義と恩寵を、
あなたの最下層の人民にもお忘れないように。だって神が
あなたの救い手として、お遣わしになられたのは、羊飼いの 2090
娘だったのですからね。—

(中略)
あなたの子孫も、お栄えになるでしょうが、そのためには心から
人民に愛されていなければなりません。慢心 (Hochmut) に陥れば、
まさにそれが没落という運命に導くことになりましょう。
今日はあなたをお救いに、貧しい小屋から私が参りましたが、
ご子孫がその罪に汚れたならば、その同じ小屋から 2100
そっと知らぬ間に、彼らを滅ぼしに迫って来ましょう。

カール太子の「何なりと希望を」という言葉には答えず、ヨハンナは個人としてのカールに友人というものを大切にすることを要求している。ここにはシラーが受け継いだ啓蒙主義の理想、すなわち中世的上下の位階制に対して友情という自由で平等な絆で結ばれた新しい人間関係への要求が見られよう。そして彼女は次に、公人としての太子には彼女の出身階層である人民に対する「正義と恩寵」(Gerechtigkeit und Gnade, 2089)を要求しているが、これは人民を代表するヨハンナに、まもなくランスで国王となるカール太子と一種の「社会契約」を結ばせているのであって、これは詩人シラーからのドイツの領邦国家領主たちへの希望であろう。そして最後の

「彼らを滅ぼしに迫って来ましょう」という予言めいた台詞を言う彼女の背後には、1789年から始まるフランス市民革命を隣国ドイツで経験している歴史学教授であったシラーがいると言える。

このように太子の子孫の未来を予言したのを切っ掛けに、ブルグントもソレルも彼女の力を褒め称えながら、彼らそれぞれの予言を求める。彼女はブルグントに彼の子孫から国王になる者たちが生まれ、今は未知である海の向こうの「新しい世界にも法を定めるでしょう」(2116f.)などと予言すると、¹彼女を思っているデュノワが、

ところで、天に愛されている崇高な乙女よ、 2135

あなた自身の運命はどうなるのかな。

あなたはこんなにも敬虔で神聖であるのだから、

あなたのために地上の美しい幸福がきっと咲き乱れるぞ。

ヨハンナ： 私幸福は

あちらの、永遠の父なる方にお任せしてありますわ。 2140

カール： お前の幸福は今後この国王に任せてくれ。

わしがお前の名をフランス中で栄えあるものに

してやり、末代の者たちにお前の名を

称えさせてやるぞ — それも今すぐ、それをわしは

叶えてやろう。 — 跪きなさい！

(彼は剣を抜き、それで彼女に触れ)

さあ立ちなさい、

貴族としてな！お前をわしは、お前の国王が、 2145

お前の名もない生まれの塵から高めたのだ。

— 墓の中にいるお前の祖先たちも貴族の列に加えよう —

お前は百合の花を紋章にするが良い、

フランス最高の家系とお前は同等にしてやろう、

お前の血族より高貴なのはヴァロワ王家の血だけだ。 2150

ヨハンナは空しいこの世のものを捨て、神の使命を果たす身でありながら、貴族という称号を受けてしまった。太子として彼女に何か報いてやりたいというカールの気持ちは理解できるが、彼女に高慢に陥らないように忠告された直後なのに、神に召された墓の中の祖先までも貴族に列するとは神の領分を侵し、さらに過去の歴史的事実までも変えてしまうことにならないだろうか。そういうものをシラーはさり気なく、ここで挿入しているように思われる。

さて、カール太子がさらに「お前のために高貴な婿どのを探す、その骨折りはわしがしてやろう」(2154)と続けると、デュノワとラ・イールが相前後してその候補として名乗り出る。これ

には太子も驚き、喜び、からかい気味に、

お前はわしとこの敵を和解させて、わしの国を統一して
くれたのに、今はわしの最も頼もしい味方を
仲違いさせるつもりか。この娘を所有できるのは一人だけだが、
そのどちらもこの褒美（Preis）に相応しいと思う。
これはもうお前の心が決めるしかない、さあ、言いなさい。 2180

女性の方に選択権を認めるという太子の言葉は先ほどのデュノワの主張と同じであるが、ヨハンナが高位の貴族に叙されて事態は変わってしまったため、ライバルのラ・イールもこのような状況では乙女心に望みを託すしかない。ところで、この太子の言葉は個人として男女に同権を公認している現在では極めて当然であるが、このヨハンナ劇の歴史的舞台では「1」で触れたように王族同士は政略結婚であった。シラーの時代もレッシングが『エミーリア・ガロッティ』で書いたように、位階の低い女性と結婚することは出世街道から外れることを意味していた。²封建的身分が無くなった現在でも、愛とは無関係の家柄とか社会的地位などによる制約が残っていることを考え合わせると、この太子は随分先進的な思想の持ち主であると言えよう。勿論このように太子を描き出しているのは作者シラーであって、彼はフランス革命が進行している隣のドイツで自分の夢を彼に託し、第3身分の農民出身である乙女ヨハンナと新しい社会契約を結ばせるに相応しく、この彼を理想化していると言えよう。

さて、その当人の乙女はこの状況に驚き、赤面して、言葉を失っている。それを見て取ったソレルは彼女に近寄って、

この高貴な乙女は、急なことに驚いて、
乙女らしい恥じらいで頬を染めていますわ。
皆さん、彼女に時間を与えておあげなさい。自分の心に問い、
女友だちを頼って相談し、この固く閉じた
胸の内の門を外すにはそれが必要ですわ。 2185

そう彼女は取り成し、ヨハンナの相談者になろうとする。「では、そうするように」（2190）と彼女に任せて、行こうとする太子を引き止めて、ヨハンナは、

それはなりません、殿下！私が頬を赤らめたのは 2192
馬鹿げた恥じらいで、困惑したからではありません。

（中略）

このお二人の高貴な騎士に選ばれて、私は有難く思いますが、

- 私が自分の羊飼いの道を捨てたのは、
 世俗の空しい高位や称号を求めてでも、
 花嫁飾りを頭に付けるためでもありません。
 私は戦いの鉄の鎧を身のまとったのです。 2200
 (中略)
- 大司教： 女は男の愛らしい同伴者となるように 2205
 生まれて来たのじゃ — 女がその自然の道に
 沿って歩むのは、天に最も相応しく仕えることなのじゃ。
 戦場にお前を呼び出された神の命を、
 もう十分果たしたのだから、鎧を脱いで、 2210
 これまで自分で拒否してきた温和な性に戻るが
 よかろう。その性には、血に染まる戦いの剣や
 鎧は相応しくないのだ。
 (中略)
- ヨハンナ： まだ私のご主人の額には戴冠がされておられません。 2220
 (中略)
- カール： 我らはランスへの道にあるではないか。 2222
 (中略)
- 勝利が間もなく平和を携えやって来て、武器はお蔵に入る。 2236
 (中略)
- そして、お前の胸にも温和な感情が芽生え、その時は 2240
 甘いあこがれを求める涙で、泣きむせぶであろう。
 (中略)
- これまでお前は何千の者を救い、幸福にして来たが、 2245
 この最終局で、お前は一人の男を仕合わせにするのだぞ。
 (中略)
- ヨハンナ： あなた方は私という者の中に女しか見ておられないとは！
 女が戦闘用の金物を身にまとして、 2255
 男どもの戦いに立ち混じって、良いものでしょうか。
 私の神が遣わした復讐の剣 (Rachschrift) を手に、振り回しながら、
 現世の男に空しい恋情を心に抱くなんて、とんでもない！

この彼女の最後の言葉から、前で触れたように、³そして大司教の 2205 詩行からの台詞にもあるように、当時では女性が男装するのは自然にも神の法にも反するものであることが分かって、ここで重要なのは、これらのやり取りを全体から見ると、ヨハンナの心に分裂が垣間見られるこ

とである。これはモントゴメリとの場にも見られたことで、そこでは彼女は敵であるとはいえ、同じ未来のある若者を聖母マリアの命に従ってあの聖剣で殺すが、その直後に彼女の心には人間的な反省が湧き起こってきた。ここでは味方同士である男と女という異性間の問題である。彼女は聖母マリアの言葉に従い、この世での女としての性を放棄したと思っていたが、二人の騎士の求婚を受けて自分の性によりやく目覚め、それを同じ女性としてソレルは「乙女らしい恥じらいで頬を染めています」(2182)と彼女の心中を見抜いていたと、この場は解釈すべきであろう。ヴォルテールはヨハンナを「聖女」か「性女」の問題としてパロディ的に描いたが、⁴シラーは彼女の〈Unschuld〉(「無実」と「処女」)の二つに分け、この場では後者の「処女」の問題を乙女から女としての性に目覚め始める彼女を描き、後に「恋情」という「罪」を犯し、「無実」とは言えない状況に陥る主人公として描いているように思われる。

さて、最後の「とんでもない」という台詞の次に「そんな私なら、生まれて来なかった方が良かったでしょう」(Mir wäre besser, ich wär nie geboren! 2260)と続くが、もちろんこれはゲーテの『ファウスト』(Faust)第1部の第4596詩行の「ああ、俺なんか生まれて来なかった方が良かった」(O wär' ich nie geboren!)⁵とほぼ同じ言葉で、この類似はヴァイマルでの二人の交遊と協力の結果であろう。⁶どちらもその意味は人間的存在価値の究極の問いであることは確かであるが、後者がグレートヘン悲劇の結果を目の当たりにしたファウストの悔恨の言葉であるのに対して、前者は破戒に至る前兆を感じ取った乙女が必死に己の女性的なものを否定しようとしている台詞と言えよう。

ヨハンナは自分の女心に起こったその分裂を必死に打ち消そうと、太子に向かって、

開戦ラッパを吹きならすよう命じて下さい！

こんな戦いのない平穏は嫌ですし、心が乱れますわ、

何かが、こんな活気のない静寂から私を叩き起こし、

自分の仕事を達成し、その運命を全うするよう、

全力で駆け抜けるようにと、追い立てますわ。 2270

こうしてヨハンナは太子に戴冠せよという神の命を達成するため、その式を挙げる聖堂のある町ランスを敵から奪い返そうと、そしてカール太子も彼女の説得に応じ、愛人アグネスに見送られ、皆を引き連れて出陣する。ここで留意すべきこととして、第一幕では戦争を避けようとしていた「軟弱な」太子が自ら兵を率いて出陣することを、書き留めておきたい。

「理性」の人トルボトの死

ブルグントも加わったフランスの統一軍はイギリス侵略軍を打ち破り、ランスを取り返すのだが、その戦闘場面はあのオルレアン解放の時と同じように、なぜか舞台から外されている。シ

ラーの時代は映画などなく、オルレアンやランスの町における攻防という視覚的スペクタクルを舞台上で実現することはもちろん、人物の顔や口元のゆがみなどという表情のアップもできないが、それを補って余り有るものにするのが俳優の所作と台詞である。特にその後者の言葉によって、乙女の「屠殺」的初戦であるスペクタクルを叙事的に見事に描き出したのは第1幕第9場のラウールの台詞であったが、ここ第3幕第6場ではイギリスの総大将トルボトの心情そして思想の発露がそこに見られる。

ここでは「ランスは失い」(2307)、その戦いで深手を負ったイギリス側の総大将と次席の地位にあるライオネルの別れの場となる。トルボトは自分の死期が近いと悟り、総大将として最後までその任務を自覚して、彼を助けようとしているお付きの部下ファストルフに、こう最後の命令を下す。「ここに、この木の下に俺を下ろして、お前は戦いに戻れ。死ぬ俺を看取る必要はない」(2292f.)。彼にとって戦争の行方を決めるのは力であり、その一戦力をもう確実に死ぬしかない自分に付き添わせて置くことは非合理的なであろう。そして首都パリは「太子と協定を結んだ」(2309)とライオネルに知らされ、ランスばかりかパリまでも失ってしまった敗北に次ぐ敗北を、トルボトはこう総括する。

馬鹿な (Unsinn), お前が勝って俺が減びなければならんとは!
 馬鹿 (Dummheit) と組んで戦えば、神々 (Götter) も敗走だ。
 崇高な理性よ、お前は神のごとき頭から生まれた 2320
 光輝く娘であり、この宇宙を創り上げた
 賢き建設女で、星たちを導く女だ。^{しつもの}7 そのお前が、
 狂気 (Aberwitz) という気違い馬の尻尾に繋がられ、
 いくら叫んでも無駄で、この酔っぱらいに
 巻き込まれている己を見ながら、共に破滅へと 2325
 落ち行かなければならない時、理性なんて何だ。
 自分の人生を偉大なもの、高貴なものに捧げ、
 賢い精神で考え抜いて、計画を立てても、
 この様だ。この世はお馬鹿様 (Narrenkönig) が
 支配しているわ。— 2330

この台詞からも明らかなように、トルボトは啓蒙された理神論者である。彼は神のごとき頭から生まれた「理性」を使って、すべてを計算し尽くし、理性的に計画を立て、フランスに侵攻し、連戦連勝の道を歩んで来た。ところが乙女ヨハンナの出現を契機にして、上官の命令に従うべき彼の兵隊 (Völker) は迷信を信じ、彼女を魔女と思い込んで逃げ出した。その彼らを総大将の彼は、あのオルレアン攻防戦後のMontgomeryの場では仁王立ちになって阻止し、戦場に戻そうとした。今回のランスの攻防戦でも同じような状況となり、上官の命令に従わない兵に振り

回され、敵将カール太子の戴冠式挙行を阻止すべきその町は奪回され、彼自身は重傷を負い、死期を迎えている。それがこの場である。この台詞はそれゆえイギリス軍総指揮官として、彼が最期に当たって戦争全体を総括したものと見えよう。この引用の最初の第2318詩行で「お前が勝って俺が滅びる」という事実・結果を前にして、それを「馬鹿な」(Unsinn)と、現代風に言い換えれば「ナンセンス」と総括している。この詩行にある「俺」(ich)はもちろんトルボト本人であるが、「お前」(du)とは誰であろうか。これは少し厄介な問題を含んでいると思われるので後に回し、それ以後の詩行からトルボトの言う「理性」について先ず考えてみよう。「この宇宙を創り上げた賢き建設女で、星を導く^{しよ}女」という表現はもちろん天地創造をした理性的存在としての神を指していようが、その神の「理性」を受け継いで、宇宙の星の運行を「万有引力の法則」として力学的に(mechanisch)把握したイギリス人アイザック・ニュートン(Isaac Newton 1643-1727)を連想させよう。つまりトルボトは理性を働かせて力学的に軍事力を計算し、数学的に敵方の兵力を十分撃破できるように味方のそれを配置して戦って来た。しかし彼の理性は、イギリス軍兵士がモントゴメリのように異国の地で郷愁に駆られること、同盟軍ブルグントの兵士たちが同じフランス人同士で戦わされている現実に忸怩たる思いを抱くこと、そしてヨハンナに代表されるフランスの人民が言葉と心の通じ合えない異国の支配者に反感や怒りを感じていること、これらの事を考慮に入れていない。つまり自分の行為は侵略であるという観点が彼の「理性」には欠けているのである。劇場の観客または読者は登場人物たちが各人各様に自分の考えと思いを漏らすのを聞きながら、そしてその劇全体からトルボトの理性の限界をそう理解すべきであろう。つまり彼は彼の「理性」で計画した侵略戦争に敗れたと見えよう。

さて、その個人としてのトルボトがそれを簡潔に総括した、あの先送りした2詩行の問題をここで見てみよう。この最初の詩行2318にはコンマが>und<の前に有るか無いかで、2つの異版がある。⁸先ず私の使用しているナチオナル版から2詩行を、その間に><つきで、コンマのある異版の原文を、そして次にその石川、野島そして私の拙訳の順で紹介しよう。

Unsinn, du siegst und ich muß untergehen!	2318
>Unsinn, du siegst, und ich muß untergehen!<	異版の 2318
Mit der Dummheit kämpfen Götter selbst vergebens.	2319

愚かさよ、貴様が勝って、わしが負けにゃならんというのか。
人間の馬鹿さ相手では、神々といえどもお手上げだ。 石川訳⁹

馬鹿な話だ。きさまが勝って、わしが死なねばならぬとは。
愚か者とあらそえば、神々さえ兜をぬぐ。 野島訳¹⁰

馬鹿な、お前が勝って俺が滅びなければならんとは！

馬鹿と組んで戦えば、神々も敗走だ。

江坂訳

この3訳の相違を先ず整理しておこう。石川氏の訳は>Unsinn<を「愚かさよ」と呼びかけ、それを主語>du<が受けて、「貴様が勝って」という一文と、等位接続詞>und<（そして）で結ばれた次の「わしが負けねばならぬ」という一文とで、合計二文からなっている。それに対して野島氏と私の訳では、>und<は「お前が勝つ」という文と「わしが負けにゃならん」という文を結び、その二文をまとめたものが「馬鹿な話だ、馬鹿な」>Unsinn<と判断されている。それを書き直せば、es ist Unsinn, daß du siegst und ich untergehen muß!（お前が勝って私が破滅しなければならないとはナンセンスである）とでもなろうか。勿論これでは論理的な文章になり、登場人物トルボトの感情を生き生きと表したシラーの韻文とは雲泥の差となる。ところで、石川氏がそのように解された原因が版の違いにあるのだろうか。すなわち氏は>und<の前にコンマのある版が使われたため、「愚かさよ、貴様が勝って、わしが負けにゃならんというのか」と訳されたのか。問題を日本語訳だけに限り、そのコンマだけに注目すれば、野島訳もその箇所はコンマで区切られている。拙訳では故意にコンマで分けなかったが、トルボトの無念な気持ちを考えると、それを表す一呼吸を置くために、ここにコンマを付けた方が良いと思う。

さて、問題をドイツ語の原文にあるコンマに戻そう。その部分だけに限定すれば、文法的には>Unsinn<（愚かさ）を呼びかけと採り、>du<（貴様）で受けていると解することもできようが、トルボトの台詞全体から見れば、誤りであろう。その語を日本語に訳すと、「馬鹿」、「愚か」となるため、石川氏は次詩行の>Dummheit<（人間の愚かさ）に引っ張られ、「愚かさ」＝「貴様」＝「人間の馬鹿さ」と採られたのではないか。野島氏は石川氏と同じ版が使われていたとしても、その詩行を「馬鹿な話だ。きさまが勝って、わしが死なねばならぬとは。」と、>Unsinn<の次のコンマを和訳では「。」にされ、>und<の前のコンマは「，」にして、両者を区別されているのか、それともそこにコンマのない版を利用され、そう訳されたのか。それはともかくとして、野島氏も次の詩行は「愚か者とあらそえば、神々さえ兜をぬぐ」と訳され、トルボトが戦った相手>du<（きさま）を次詩行の>Dummheit<（愚か者）と解されている。しかし私はその>Dummheit<（馬鹿）を両氏と違って、戦いの相手すなわち敵ではなく、味方として「～と組んで」と訳した。これについては後に詳述するとして、先ずこのコンマの有無について決着をつけておこう。

グリムの辞書は見出し語>Unsinn<で、シラーのこの詩行を例文として挙げているが、それは3)の「半狂乱になること」(raserei)、4)の「最高の馬鹿」(höchster grad von unklugheit)などの意味をつけた項にではなく、5)項で「啓蒙主義で好まれた語で、その概念は主にラテン語の nonsensus, 英語の nonsense」と記し、そのh)で比喩的(bildlich)な用例としてこの第2318詩行を挙げている。そして、そこには問題のコンマがある。¹¹石川氏がどの版が使われたかは分からないが、グリムはコンマがあっても、野島氏と私のように解している。

さて、このコンマの有無を歴史的に見てみよう。この作品が初版本としてベルリンのウン

ガー (Johann Friedrich Unger 1750-1804) 書店から出版されたのは1802年である。そしてその第2版はコッタ (Johann Friedrich Freiherr Cotta 1764-1832) 書店からで、他の2作品と1巻本にまとめられた作品集として1805年の復活祭見本市を目指して計画・準備されたが、結局出版されたのはシラーの死 (1805年5月9日) 後の5月末であった。注8のIIで示したように、私が利用しているナチオナル版は1948年から発行されたもので、この作品は第9巻に収められている。そしてその編集に当たったのはベノ・フォン・ヴィーゼ (Benno von Wiese) とリーゼロッテ・ブルーメンタール (Lieselotte Blumenthal) で、彼らはその出版にあたって依拠したのはウンガールの初版本でも、コッタの第2版でもなく、シラーがその後者の出版準備のため2回に分けて、1805年2月3日と同月の25日にコッタに送った (ウンガールの初版本に訂正を加えた) 原稿であると書いている。そして、そうした理由を、シラーの死後に出たその第2版はシラーのその校正原稿に忠実ではなく、申し分のないものとは言えない (nicht einwandfrei) ものだからと断っている。¹²つまり、コッタの第2版はシラーがコンマを取って校正したのに、それを見逃して出版してしまったと言う訳である。こうして見ると、ナチオナル版がシラーの望んだものに最も適したものと言えよう。注8で示した色々な版の発行年から推測すると、コンマの無いものはIのコッタ版を唯一の例外として、ナチオナル版発行以後のものであるから、他の版IIIとIVはシラーの意に適しているそれに倣っているのであろう。それにしても興味深いのは、同じコッタ版でもVからVIIまですべてコンマ有りとなっているのに、それ以前発行の1823年版だけがコンマ無しとなっている。どうしてそのIだけがそうなったのかは今の私には分からない。そのコンマの有無についてはこれ以上の詮索は止め、あのトルボトの台詞に戻ろう。

あの最初の詩行の >du< は具体的に何を指しているのだろうか。石川氏はそれを >Unsinn< (愚かさ) そしてさらに次詩行の >Dummheit< (人間の馬鹿さ) と、野島氏はそれを同じように、訳語こそ違いが >Dummheit< (愚か者) と解されている。つまり両氏は >kämpfen< (戦う、争う) という動詞と前置詞句 >mit der Dummheit< を緊密な関係にあると解され、「馬鹿を相手に戦う、あらそう」と訳されている。勿論この自動詞「戦う」は例えば決闘などで共にそうする相手があってこそ初めて成り立つのだから、それを表す前置詞句 >mit Dativ< (3格と) を支配することが多く、同じような動詞として >ringen< (レスリングをする、素手で戦う) や >fechten< (フェンシングをする、戦う) がある。しかしこれらは「対抗、反対、敵対」を表す前置詞句 >gegen Akkusativ< (4格に敵対して) を採ることもできる。そしてシラーはこの作品の第2幕第1場でブルグントに第1292詩行でこう言わせていた、>Was tu ich hier und fechte ich gegen Frankreich?< (なんでわしがここに居て、フランスと戦うのか)。その詩行では明らかに >fechten< は >gegen Frankreich< (フランスと) と「敵対」を表す前置詞を使っていたのに、¹³なぜこのトルボトの第2319詩行ではそうしなかったのか。この2種類の前置詞句のどちらを採るべきかという問題は、最初の詩行にある >du< (お前) は誰かという問題と、次詩行の自動詞 >kämpfen< と前置詞句 >mit der Dummheit< の関係はどうなっているのかという問題と実は密接に関係し合っている。

グリムは >kämpfen< を見出し語とした箇所、この動詞が >mit< 前置詞句を採り、「～と（敵対して）戦う」用例としてシラーの他の作品からも多く引用しているが、この詩行は利用していない。¹⁴ところが他の見出し語 >Dummheit< で、カントの定義 >mangel an urtheilskraft ist eigentlich das was man dummheit nennt<（判断力の欠如は馬鹿と言われている将にそのものである）の後に、この詩行が用例として使われている。¹⁵グリムはこの詩行を「神々が戦っても無益に（vergebens, 2319）になってしまう相手を馬鹿」と採らなかったから、つまり動詞と緊密な関係にある前置詞句ではなく、「～と共に、組んで」という自由規定のそれと見抜いたため、>kämpfen< の見出し語ではなく >Dummheit< の所で例示したのではないだろうか。

私はそれ故この前置詞句を自由規定と解し、「馬鹿と組んで」と訳した。トルボトの台詞全体から見ても、この「馬鹿」と呼ばれているのはもちろん彼の兵隊たちである。彼らは迷信を信じて「狂気」に陥り、カントの定義通りに「乙女を正しく小娘と判断せず、魔女と思い込んでしまい、自らの判断力の欠如」を露呈する「馬鹿」で、トルボトの「理性」的な命令に従わず、「気違い馬」のように戦線から離脱し、その彼らを前線に戻そうとする司令官を「尻尾に繋ぎ、破滅へと落ち」て行った。では、トルボトに「馬鹿」呼ばわりされている兵隊たちは、彼の総括の最初にあったように「勝った」（siegst）と言えるであろうか。トルボトは、はっきりと「破滅へと落ち」て行った、と言っているではないか。そしてトルボトも彼らと「共に破滅へと落ち」、最初の詩行にあったように「滅び（untergehen）なければならない」ことになる。では最初のあの「勝った」>du<（お前）は誰か、それを乙女ヨハンナと解せば、その矛盾はきれいに解消するではないか。トルボトはイギリスからフランスに侵攻し、連戦連勝でオルレアンまで来たが、乙女の出現から負け戦の連続となり、今この場で自らの死を迎えている。そしてそのイギリス軍司令官として、この戦争全体の総括をしているのであり、「馬鹿な兵隊」を戦場に戻そうと戦った後半だけの総括ではない。啓蒙された「理性」の持ち主である彼としては、それまで連勝で来たのに、ここで「小娘のお前が勝って、俺が滅びなければならんとは、ナンセンスだ」、これが彼の全体的総括で、そして第 2320 詩行から長々と彼はそうなった敗因を「共に戦う」はずだった兵隊たちに、すなわち彼のような理性を持ち合わせず、迷信を信じて戦線から逃亡した「馬鹿」な兵隊たちに求めている。そんな「馬鹿な彼らと組んだら、（小娘のお前を相手にしても）神々が戦ってもお手上げだ」、これが次の 2319 詩行の意味で、その括弧内の戦う相手を表す >gegen dich<（お前を相手にしても）はその前詩行の >du< で示されているので、省略されている。トルボトにとってそれ故この世はまさに「ナンセンス」で、神のような「理性」ではなく「お馬鹿様」（Narrenkönig, 2329）が支配しているのである。

さて、私はあの 2 詩行に少しこだわり過ぎ、この劇の進行を滞らせてしまったかも知れない。そのトルボトにライオネルは、「あの世でまたお会いしましょう、その長いお付き合いのために、お別れは短く」（2345）¹⁶と失礼し、総崩れになっているイギリス軍の指揮を執るため、乙女が暴れ回っている戦場に戻っていく。トルボトはそれを見送りながら、最後の台詞を、

間もなくおさらばだ。俺はこの地球に、そして
永遠なる太陽にこの原子ども（Atome）を返すのだ。
こいつらは俺という姿をまとして苦楽を紡ぎ出してくれた —
この世に武勇を轟かせてきた
猛きトルボトの残すものが、 たった一握りの 2350
軽い塵だけとは、 — 人間の一生なんて
こんなものだ、 — 我らは人生の戦いで
奪い、いくら獲得してきても、
最後に分かることは、無（Nichts）ということだ、
かつては崇高に（erhaben）、そして望ましく思われたもの、 2355
そんなものすべて、心奥から侮蔑すべき対象だ —

こう一生を総括して、「理性」の人トルボトの台詞は終わる。ここで一つ断っておきたい事がある。トルボトはヨハンナに負けたと言っていたが、彼女が直接彼を戦死に導いたのではないという事である。それを示す彼女の台詞は間もなく黒騎士との場に出て来るので、そこに譲るが、シラーはこの劇でイギリスとフランスの百年戦争という舞台に登場人物をそれぞれ独立した個人として投入し、彼そして彼女ら独自の思想と性格などに従って行動させ、そして自ら別々に退場させている。トルボトは機械的な唯物論で啓蒙された「理性」の人で、その理性に従って侵略し、そのように総括して人生の幕を下ろした。この対極が感じやすい心を内に秘めた乙女ヨハンナと言えよう。それゆえ彼女は自分の前に聖母マリアが現れ、あの兜も神から遣わされたものと信じてしまった。その兜で女という性だけでなく、モントゴメリの場で端的に示されたように個人的人間性をも隠し、ヴァロア・フランス王家の百合が刻印されている「剣」によって異国のイギリス人を情け容赦なく皆殺しにして来た。侵略者に対する激しい憎悪という感情、そして芽生えてきた自分の女心に恐怖し、そんな自分なら「生まれて来なかった方が良かった」と自己の性を必死に否定しようとする。この女性的感情を兜で押し殺し、この戦場で敵のイギリス側から見れば怒り狂った狂女のように復讐の殺人剣を振り回しているが、彼女は間もなく第10場でその人間的試練を受けることになる。

さて、先を急ぎ過ぎたようであるが、その前の第7場では、その「一握りの軽い塵」（原文、2351）と化したトルボトの遺体に彼の部下ファストルフが付き添っている。そこに太子カールが兵を率いて近づいて来る。ファストルフは「下がって、離れておれ！この死者に礼を尽くせ、お前らには生存中は近づくことさえ願えなかったお方だぞ！」（2361f.）と、主人の遺体を守ろうとする。デュノワはそれを見て、「恐れられ、不屈の男だったトルボト！お前のとてつもない精神は、フランスの広大な国土を征服しても飽き足らなかつたのに、今はこんなちっぽけな場所で満足しているのか」（2367ff.）と冷徹であるが、カールはその死者を静かにじっと見つめ、「彼を打ち負かしたのはより高いお方で、我々などではない。彼がフランスの地に横たわる様は、決

して手放そうとしなかった己が盾の上の英雄そのものではないか」(1374ff.)と称え、兵士たちに彼を丁重に葬り、彼が倒れ横たわっているこの地に、この英雄の記念碑を建てるように命ずる。同じものを見ても、デュノワとカールでは随分違って来たと言えよう。第1幕の太子カールは最初から戦いを避け撤退を選ぶ太子であったのに対して、デュノワは好戦的な武人で、観客の目には後者は頼もしい男で、前者は軟弱で駄目な統治者と映ったであろう。そのカールがここでは兵を率いて出陣し、そしてこの戦場で敵将の臨終を見て、人間的スケールの大きさと騎士道精神をこのように示したのである。デュノワとラ・イールは武人のままで、ブルグントは翻意しただけ、トルボトは死に際して「無」を悟っただけ、そしてヨハンナは自己分裂しそうになっているが、未だ自分を神々の遣いと信じ込もうとしている。それ故シラーはこの場の太子カールで自ら成長した人物を初めて描いていると言えよう。このカールの言葉に心打たれたファストルフは、最初の反抗的な態度とは打って変わって、「陛下 (Herr), 私はあなたの捕虜になります」(2383)と、自ら剣を差し出す。カールはその彼に、「野蛮な戦中でも、忠実という義務は称えられるべきだ。お前は自由の身で (frei) お前の主人の埋葬に付き添ってやれ」(2384f.)と、その剣を返す。単に武勇を誇るデュノワに対して、古い騎士道だけでなく人間性に富んだ太子にシラーはカールを成長させている。

黒騎士とは？

ラ・イールとデュノワは乙女を守ろうと、これまで戦場ではいつも彼女に付き従って来たが、今回は戦いに紛れ見失ってしまう。そのヨハンナは全身を黒の武具で包んだ騎士を追っているうちに、戦闘の中心から一人だけ離れてしまい、その黒騎士と二人だけになっていることに気づき、

ヨハンナ：奸知に長けた奴め、今お前の悪だくみが分かったぞ。

お前は逃げるふりをして、私を騙して戦場から

おびき出し、それでイギリスの息子たちの

首を救い、彼らを死と破滅から遠ざけたのだな。

2405

それなら今すぐお前から葬ってやろう。

黒騎士：なぜお前はそんなにも怒り狂って俺を追い、

跡をつけ回すのだ。俺はお前の手に掛って、

やられるような部類ではないぞ。

この黒騎士は自分をヨハンナとは違う「部類」と言っているが、その原文全体はこうである。
>Mir ist nicht bestimmt, von deiner Hand zu fallen.< (2408f.)これを直訳すれば「お前の手に倒されるように、俺は規定され (bestimmt) ていない」となり、「部類」と訳した原語は「定

める、規定する」という動詞 >bestimmen< である。これは黒騎士の自己「規定」であるが、同時に人間ヨハンナも「規定」している。即ち黒騎士の方が上級の「部類」で、下級の人間ヨハンナには倒されないということである。これと同じ「規定」がゲーテの『ファウスト』第1部の「夜」の場に出てくる。ファウストは地霊を呼び出しはしたが、その恐ろしい姿に思わず顔をそむけてしまい、直視できなかった。さらに彼はその霊に「お前はお前が把握 (begreifst) できる霊 (Geist) と同じだが、俺と同じではない」¹⁷ と言われ、神の姿に似せて創造された者であると思っていた自分が、地霊以下に「規定」された存在であったと知り、絶望する。ところがシラーのヨハンナは、兜の面頬を下ろしている黒騎士の顔が見えないため、ファウストの場合と違って、彼の正体が分からない。

ヨハンナ： お前は誰だ。面頬を開けよ。 — 戦闘の中で
戦っていたトルボトが倒れるのを見ていなかったら、 2415
お前はトルボトだな、と言うところだ。¹⁸

その彼女に黒騎士は名乗りもしないで、

アルクのヨハンナよ、お前は勝利の翼に 2420
乗って、ランスの市門まで迫って来た。そこまでの
名声で満足しておけ。お前に奴隷 (Sklave) のように
仕えてきた幸運が腹を立てて、自ら出て行ってしまわぬ内に
暇をやれ。こいつは忠実 (Treu) というものが
大嫌いでな、誰に対しても最後まで仕えてくれないのだ。 2425
ヨハンナ： お前は私に途中で、
この仕事を投げ出せとでも言うのか。
これを私はやり遂げ、神との誓いを果たすのだ。

(中略)

黒騎士： 見ろ、向うにランスの町の塔がそびえ建っている。
お前の戦いの目的地で、終点だ — 大聖堂の 2435
ドームが輝いているのが見えるだろう、
そこにお前はきらびやかな戦勝の装いで乗り込み、
お前の国王に戴冠し、誓いを果たすことになっているのだろうが、
— ここでやめておけ。引き返せ。俺の警告を聞け。

この黒騎士は乙女に「アルクのヨハンナよ」と呼びかけているが、これは聖母マリーアが「ヨハンナ」(1078) と呼びかけたのとは対照的で、この騎士が彼女の父の姓を知っていることを示

している。キリスト教では個人が信仰告白し神と契約を結ぶのだから、マリーアが彼女を個人名で呼びかけるのは当然であるが、黒騎士のそれは彼女が生まれ育ったドンレミ村の習俗に合致していると言えよう。そして「人間とは異なった部類」のものと言え、あの老大木の檜に宿するという霊であろう。この霊は、ヨハンナが放牧していた子羊を見失った時、その木の下で眠っている彼女の夢に現れ、その居場所を教えてくれたのであり (Vgl., 1065ff.), いわば村の古い守り神である。

拙論「1」の14頁で述べたように、彼女の父親は彼女が夜遅くその檜の所に行くのを心配し、さらに「彼女がランスで王座に座り、父の彼も、二人の姉、そして国王までも彼女の前でひれ伏している」(Vgl. 115ff.) 夢を見て、自分の娘は「罪深い高慢を育てている」(130) のではないかと案じていたが、この黒騎士も「ランスに入るのは止めて、故郷に帰れ」と警告している。檜の木に宿する霊にとって「アルクのヨハンナ」が侵略軍をこの村に近づけないよう追っ払ってくれるのは望むところであるが、彼女がランスにまで行って、もうドンレミ村に戻って来られないようにしてはならないため、村の守護神としての任を果たそうと、この場に登場したのだろう。ヨハンナは聖母マリーアの命によりフランス民族の一員としてイギリスという侵略者に対抗しているが、その彼女を案ずる黒騎士と父親の観念は彼女のように国にまで広がらず、その一部でしかない狭いドンレミ村に止まっている。このように娘を自分の狭い勢力圏の内に囲って保護しようという点で両者は同じであるが、父親のアルクは古い巨木崇拜などというアニミズムは邪教として忌み嫌い、娘はこの檜の霊に取りつかれ高慢の罪に落ちていると思込み、彼女が真なる神キリストに戻り、自分が選んだ村の若者と結婚し、村に留まることを願っていた。ところが娘のヨハンナの方はその檜の木を有難いものと思ひ、同時にキリスト教も信仰し、その大木の下でその向かいに建つキリスト教の礼拝堂に向かって祈っていた時、神の預言を聖母マリーアから伝えられ、フランスを救うため故郷を出奔し、イギリス侵略軍と戦い続け、ようやくランスの手前まで来たのであった。こうして見ると、父親の方は自分をキリスト教の敬虔な信者だと思込んでいるが、その内実は古い巨木に宿る霊と同じドンレミ村主義であり、娘のヨハンナの心は父親の心と檜の霊をとともに有難いものとして受け入れながらも、その村境をはるかに越え全国に広がり、フランス民族に肩入れをする聖母マリーアの遣いだと思込んでいる。どうもシラーは各人各様に自分の神または神々を信じさせ、それを正しいものと思込ませて、劇中でのそれぞれの役を演じさせているようである。

さて劇の進行に戻るとして、黒騎士がアルクの娘ヨハンナにそう警告し、去ろうとすると、彼女は彼の前に立ちはだかり、切りかかる。しかし彼は人間の力が及ばない存在で、逆に彼の手が彼女に触れただけで、彼女は動けなくなり、立ちすくむ。彼は「死すべき定めにある奴を相手に、殺しておれ」と言い残すと、辺りは突然暗くなり、稲妻が走り、雷鳴が轟く中を、「地中に消えて行く」。この最後のト書きはまさにファウストの地霊を思わせる場面であろう。しばらくして彼女は、

あれは生き物ではなかった。一人を惑わす
地獄の幻が、神に反抗する霊が
地下の火の沼から立ち昇って来て、私の胸に秘めた
高貴な心に揺さぶりを掛けようとしたのだけ。
私には神様の剣があるんだもの、何も怖くないわ。 2450

彼女は黒騎士の姿をまとったこの霊を神に反する存在と見なし、神から授けられた「剣」にその任務完遂の自信を託し、揺らぎかけた心に高貴さを取り戻している。黒騎士の「お前がここまで来られたのは運が良かっただけだ」という警告を、それは神から授かったこの剣がもたらした結果で単なる運ではないと彼女は否定し、これからも神の遣いとして剣を振るい、ランスへの道を切り開いて行こうと決意を新たにす。ここで興味深いのは、イギリスとその同盟軍の兵たちが乙女を魔女と呼んでいたように、ヨハンナも手強い黒騎士を「神に反抗する霊」と推理していることである。侵略軍またはその同盟軍、そしてそれに抗する防衛側という各人各様の違いはあるにしても、人間というものは自らを正しいと思って行動していると、その敵は悪であり、その中でも手強い相手には悪魔のレッテルを貼り、自己を合理化するものようだ。

兜の意味と剣の喪失

そのヨハンナの前に、総大将トルボト亡き後のイギリス軍を統率するライオネルが登場し、

呪わしき女め、さあ構えろ、一生きて
この場を離れられるのはどちらかだ。 2455
お前は我が民族の最良の者たちを殺しに、殺し、
高貴なトルボトは俺の胸に抱かれて、
偉大な魂を天に送られたのだ。一俺はあの雄々しい
お方の仇を討つか、彼と運命を共にするかだ。
お前にここで名誉を授けてやる者が、死ぬにせよ、 2460
勝つにせよ、その名を教えてやろう、一俺は
ライオネルで、我が軍最後の指揮者だ。
そしてこの腕はな、これまで負け知らずだ。

そう言うとき、ライオネルは彼女に切り掛って行くが、彼女は数回切り結んだだけで、彼の剣を叩き落してしまう。そうなったのは「まぐれだ」(Treuloses Glück!, 2464) と叫んで、自分の負けを認めず、彼は素手で彼女に掴み掛って行く。ヨハンナの方はサッと後ろに回り、彼の兜をグイッと掴んで落し、彼の顔をパッとむき出しにし、右手の剣をピタッと彼に向けて、「お望み

通り、これを食らえ。聖なる乙女様（Die heilige Jungfrau）が私を通してお前を犠牲とされるのだ」（2464f.）と止めを刺そうとする。もちろんこの「聖なる乙女」は聖母マリアのことで、彼女は人間の男、夫であったヨーゼフと交わずにイエズスを産んだという事で、カトリック教会によって処女（Jungfrau）であり、聖なる（heilige）者とされている。それ故このヨハンナの台詞は、聖母マリアの「イギリス人は全て殺せ」という命により、さらにその彼女から授かったこの剣で、ライオネルの命を彼女への犠牲として捧げると言う意味である。ところが彼女はその瞬間、彼の素顔を見てしまい、彼の眼差しに彼女は捕えられ、突然動けなくなり、その剣を握っている腕はゆっくりと下りて行く。まさにこれがあのモントゴメリの場（第2幕第7場）との相違で、¹⁹この戦場では、イギリス製の兜が隠していた個人である男性ライオネルの素顔を乙女ヨハンナは見てしまったのである。

敵である自分の首を刎ねようとしなない彼女の様子を見て、ライオネルは騎士らしく「俺は容赦など望まんぞ」（2468）と急かすのに対して、彼女は手で彼にこの場から逃げるようにと合図をする。

ライオネル： 俺に逃げろと言うのか。俺に命の恩を着せようと言うのか。 — 死んだ方がまだ。 2470

ヨハンナ：（顔をそむけて） 助かって頂戴！
あなたの命を手中にしていたなんて、
思いたくもないわ。

ライオネル： 俺はお前が憎いし、お情けも真平御免だ。 —
容赦など無用に願いたい — お前の敵だぞ、殺せ！お前を
毛嫌いしてるんだぞ、お前を殺そうとした敵なんだぞ。 2475

ヨハンナ： 私を殺して、
— 逃げて！

ライオネル： 何と！これはどうしたことか。

ヨハンナ：（顔を覆い） ああ、悲しい（Wehe mir）！

ト書きに「顔を覆い」とあるのは、この時ヨハンナはもう兜を脱いでいることを表している。そしてこの兜はあのジブシー女由来という代物であるが、彼女はそれを「神様がこうして私に授けて下さったのだ」（426）と思い込んだ、まさにそれである。兜は戦場で身を守るものであるが、同時にその個人を隠すもので、ライオネルという男性の素顔を隠し、単なるイギリス侵略軍人にしてしまい、そしてヨハンナの若くて美しい女の性を隠し、侵略者に対する復讐鬼にしていた代物である。この二人は戦場でその兜が隠していたそれぞれの性と個人に遭遇し、見合ったのである。

「ああ、悲しい」と言う彼女にライオネルは驚き、近寄って、「戦場で負かしたイギリス人は皆

殺しにされているのに、どうしてお前は俺に情けをかけるのだ」(2477)と不思議がる。彼女は彼のその言葉により「イギリス人は皆殺せ」という聖母マリーアの命を思い出し、剣を振り上げるが、彼の顔を見ると、またそれを下ろしてしまう。その命を果たせなくなった自分に困惑し、その聖女に助けを求めてか、または自分の不甲斐無さを詫びてか、「聖なる乙女様！」と叫ぶ。つまり、彼女は彼に一目惚れしてしまったのだ。

ライオネルの方はここで突然その名を耳にして、「お前はなぜそんな聖女の名を呼ぶのだ。向こうはお前のことなどご存じないし、天とお前には何の関係もないのだ」(2479-81)と声をかける。これは彼女を「自分は神に選ばれた戦士だ」という妄想から解放してやろうと言う思いからであろうが、同時に彼はそれで、自分がトルボトと同じ啓蒙主義的「理性」の持ち主であることを漏らしていよう。それゆえ彼には彼女の苦しみなど理解できないが、さらに近寄って素顔のヨハンナを見ているうちに、自分の命を寛大にも救ってくれた彼女を思いやる気持ちが湧き、それと同時に敵としての彼女に対する憎しみが消えて行くのを感じ、

こんなにも若く、美しい^{おなご}女子がと思うと、哀れでならん。

お前を見ていると、何か俺の胸にグッと来る。俺は

お前を救ってやりたい — 俺にできることを言ってくれ！ 2490

来い、こっちに来い！そんな恐ろしい紐帯 (Verbindung) は

切つてしまえ — そんな武器は投げ出してしまえ！

ヨハンナ： 私はそれを振るうに相応しくない女になってしまった！

ライオネル： そんなもの

捨てろ、早く、そして俺について来い (folge mir)！

ヨハンナ：(びっくりして) あなたについて行くんですって！

ライオネルの方も兜を取った彼女の素顔を見て、命の恩人ということを超えて、その乙女らしい若さと美貌に魅了されてしまったようだ。「紐帯」(原文では、2492)とは彼女と聖母との「契約」を指し、「理性」的な彼の目から見れば、馬鹿な妄想から覚めて、そんなものは反故にしろと言うことになる。 「武器」を捨てろと言うことは、二人は敵対関係から脱し、愛で結ばれる関係になるのだから、それは無用の物になるということだけでなく、女には相応しくないということも含んでいよう。いや、むしろ後者にアクセントがあり、彼も女の男装を禁じた当時の常識から発想し、相応しくないどころか危険な剣など捨てて、騎士道精神に満ち溢れた男の俺は女としてのお前を守ってやるから「俺に従って、ついて来い」という意味だろう。もちろん彼女にとって、聖母マリーアから契約の印として授けられたこの剣を捨てることなど、許されることではない。その授与は「男の愛を拒否し、純潔を守る」ということを大前提にしたものであり、その剣で「イギリス人を皆殺し」にしなければならなかったのだが、²⁰ 彼女はライオネルに止めを刺せなかっただけでなく、女心まで奪われてしまったようだ。

同国人デュノワヤラ・イールの求婚により、彼女は自分の女の性を意識し始め、それを隠すかのように兜をかぶり、この戦場でフランスに肩入れする聖母から授かったヴァロワ王家の紋章の百合を刻印したこの剣を振るって、侵略して来たイギリス人殺しに普遍的フランス人として没頭していたが、兜を偶然はがして見てしまったライオネルは素顔の個人であった。あのモントゴメリの場合は兜を通した声だけから、一般的人間としての彼を知り、彼女の心は同情心で満ち、そのため手はおのき震えはしたが、その瞬間その剣は彼女の「手を支配し、まるで生きている霊のように、自ら切り込んで行った」。²¹ 同じ普遍的人間だけなら、「生ある者はいつか死ぬのだから、お前なんか死ね」(1653f.)、イギリス人としてフランスで犯した侵略の蛮行の復讐はこの剣でしてやる、と言うことであろう。

それに対して恋・愛は具体的・個人的である。しかもそれが極限に達すると、愛するその個人のために自己を犠牲にする場合さえある。神の命により殺すべき敵で、しかも敵軍の司令官であるライオネルに、「私を殺して、逃げて」と言うヨハンナの台詞がそれを示していよう。彼の方は愛する恩人ヨハンナを妄想から救うため連れて行こうとするが、そこにデュノワとラ・イールがやって来るのが見える。

ヨハンナ： 御落胤が来るわ。彼らだわ。二人で私を捜してる。

あなたを見つけたら、 — 2500

ライオネル： 俺がお前を守ってやる。

ヨハンナ： あなたが彼らの手で殺されたら、私死んでしまうわ。

ライオネル： 俺の方が大切なのか。

ヨハンナ： 天の聖女様！

ライオネル： また俺に会ってくれるか。便りをくれるか。

ヨハンナ： だめ、絶対ダメよ。

ライオネル： また会えるよう、この剣は

そのための^{かた}形だ。 2505

この短い会話はヨハンナの苦悩をよく表している。彼女は味方のデュノワヤラ・イールより彼の方を大切に感じているが、それは祖国フランスへの反逆であり、聖母マリアの命に反すことになる。この「天の聖女様！」は彼女のどうしようもない悲鳴であろう。そして聖母から授かった剣までライオネルに再会の担保として取られてしまう。神から授かった「三種の神器」のうち、個人を隠す「兜」はこうして効力を失い、人を殺す「剣」は恋人との約束の形に取られ、彼女に残ったのは、幼子イエズスを抱いた聖母マリアが描かれた「旗」だけとなった。

そこにあの二人がやって来て、逃げて行くライオネルを見送りながら、無事なヨハンナを見て喜び、「戦いは勝利し、ランスは市門を開き、国民は歓声を上げて国王のもとに押し寄せている」(2510ff.) と、国中の喜びを知らせるが、彼女の方は血の気を失い、崩れ落ちかかる。二人はそ

の彼女の鎧を解き、腕の傷口から血が流れているのを発見する。自分が出血していることに初めて気づかされた彼女は、あの時あの黒騎士に彼女の鎧の上からちょっと触れられただけでこんな傷を負わされたこと、そして神の遣いと信じていた自分があの霊にも劣る「部類」の単なる人間であったことを悟らされたことであろう。しかしその傷よりライオネルから受けた恋の痛みの方が大きく、そしてこのために聖母との契約を破ってしまったという絶望からであろう、彼女は「手当てなどせず、その血と一緒に私の命を流して」と言う、気を失い、そして幕が下りる。

ここで読者の記憶に留めておいて欲しい事を二つ書き留めておこう。その一つは彼女のこの手傷についてで、彼女はこれが黒騎士から受けたものであることを知ったであろうし、デュノワとラ・イールはこの戦いで負傷したと確信したであろう事、そしてこの二人は彼女が聖剣を紛失した事に当然気づいたであろう、その二つである。シラーはその後の劇の展開の中で、ヨハンナにはこの手傷の件で彼女の運命を決する場面でも無言で通させ、デュノワとラ・イールには聖剣の紛失についても忘れさせ、他の登場人物たちにも気づかせていない。しかし、観客は知っている。この事をぜひ留意しておいて頂きたい。

乙女の咎と苦惱

次の第4幕第1場は96詩行にのぼるヨハンナの長い独白で占められている。先ず各8詩行の2詩節では、戦いが終わり、町中はお祭り用に飾り付けられ、音楽と踊りに湧き返り、国中からお祝いに人々が集まって来る様子が描かれ、そして最近までイギリス同盟軍と太子側の二つに分かれて憎み、血を流し合っていたが、今では皆が心一つにして喜び、共にフランス人であることに誇りを持ち、正統なフランス国王の息子、すなわちカール太子に忠誠を誓うと歌われる。フランスは統一され、イギリスから取り戻したこの町ランスの大聖堂で間もなく、カール太子を国王にする戴冠式が催されるわけである。

そして次の第3詩節ではヨハンナ自身のことの一転して、その大事業を成し遂げた最大の功業者である彼女の心の内が、「私の心は変わり果て、その喜び皆と共にできず、心はイギリスの陣営に向かい、眼差しはあの敵の方にさ迷っている。それで私はこの胸の重い咎を隠そうと、この喜びの輪からそっと抜け出してるの」(2536ff.)と歌われる。ここまでの各詩節はヤムブス(Jambus, 弱強脚)5脚で8詩行からなり、脚韻も abababcc と正しく踏み、合計3詩節、24詩行となっている。

ところが次の詩節から詩形が乱れる。これが周囲の挙国一致のお祭り騒ぎとは逆の、彼女の心の内に生まれた矛盾と葛藤を表すことになる。

何なの、私って？この清き
胸に男の姿を宿すなんて、
この心は、天の栄光に満たされてるのに、

この世の愛にときめいても良いの。 2545
 祖国の救い主の私が、
 いと高き神の戦士の私が
 祖国の敵に胸焦がすとは！
 清朗なるお天道様に、これが知られるぐらいなら、
 恥知る私が、この身を滅ぼしてやるわ！ 2550

以上の拙訳では表しきれない、この乱れた9詩行（本来の8詩行に1つ加えられ、9詩行に増えたもの）を、原詩の隣にその詩脚（Versfuß）を強（Ẋ）、弱（X）で示すと、次のようになる。

Wer? Ich? Ich eines Mannes <u>Bild</u>	ẊẊ ẊẊ ẊẊ ẊẊ	a
In meinem reinen Busen <u>tragen</u> ?	ẊẊ ẊẊ ẊẊ ẊẊ X	b
Dies Herz, vom Himmels Glanz <u>erfüllt</u> ,	ẊẊ ẊẊ ẊẊ ẊẊ	a'
Darf einer irdschen Liebe <u>schlagen</u> ?	ẊẊ ẊẊ ẊẊ ẊẊ X	b
Ich meines Landes <u>Retterin</u> ,	ẊẊ ẊẊ ẊẊ ẊẊ	c
Des höchsten Gottes <u>Kriegerin</u> ,	ẊẊ ẊẊ ẊẊ ẊẊ	c
Für meines Landes Feind <u>entbrennen</u> !	ẊẊ ẊẊ ẊẊ ẊẊ X	d
Darf ichs der keuschen Sonne <u>nennen</u> ,	ẊẊ ẊẊ ẊẊ ẊẊ X	d
Und mich vernichtet nicht die <u>Scham</u> !	ẊẊ ẊẊ ẊẊ ẊẊ	e

詩脚は同じヤムプスであるが、その前までは5脚であったものが、ここでは4脚に減り、第2、4、7と8詩行は弱音節が一つ多く、余り脚となっている。原語の下線部と左のアルファベットで示したように8詩行まで aba'bccdd と脚韻を踏んでいるが、最後の詩行は、脚韻がアーム >am< と前の脚韻とは無縁な音声になって、特別な詩行であることを示している。文法的な問題として、第1から2詩行に掛けての疑問文は、普通 >Ich (darf) eines Mannes Bild in meinem reinen Busen tragen?< となるが、その助動詞 >darf< がヤムプス脚を維持するため省略され、その省略は第4詩行の初めに出て来る >Darf< によって気づかされる。第5詩行から始まる文も同様にその助動詞が抜け落ち、第8詩行の >Darf< が前文の >entbrennen< とこの詩行の >nennen< 2つの不定詞を支配し、さらに疑問符ではなく感嘆符で閉じることによって、お祭りムードの周囲とは対照的なヨハンナの心の内が激しい矛盾に満ちていることを表している。最終行の語順は普通 >vernichtet die Scham mich nicht?< となり、その前文と共に、この二文を（ ）内に少し補って訳せば、「私は清朗なるお天道様に（公に）それを言うのが許されるか？（いや許されるはずはないが、たとえ許されるとしても、その前に私の）恥が私を滅ぼさないか？（いや滅ぼすに違いない!）」で、感嘆符で閉じられている。この詩節の結論は余った最終

詩行で、彼女の清と性の矛盾が極限にまで達し、その解消として自殺まで暗示していると言えよう。

さて、ここで舞台裏の音楽の転調に合わせて、詩形もヤムブスから1詩行4強弱脚のトロフェーウス (Trochäus) に変わる。これは4詩行で1詩節を構成するが、それが3詩節続き、その最後の第3詩節には余り詩行が1つプラスされ、5詩行になっている。その内容はこう歌われる。その第1詩節では、周りの祭りの楽の音が彼女の心を和らげ、恋する男の声を、そして彼の姿を彼女に思い出させると歌われ、それに第2詩節が、戦場でなら武器の放つ音に激しい怒りが呼び起こされ、勇気が湧いて来るのにと続き、第3詩節では再び、この楽の音と歌声が彼女の心を抱え込み、胸に秘めた力を甘い憧れに融かし、と歌われ、これに第5詩行が「哀愁の涙に変えてしまう！」(2563)と特別に付加されている。すなわち、この最後の1詩行がこれまでの3詩節を総括した結論となっている。

さて、彼女は涙を流したというカタルシスによって新しい精神段階に達したらしく、現在と過去の自分を分析し始める。詩形も5脚のヤムブスに戻り、先ず10プラス1詩行で、次に同じ詩形で6プラス1詩行の台詞が続くが、まず前者から見てみよう。

彼を殺すべきだったの。彼の目を見てしまって (sah),
そんなこと私にできる訳ないじゃない。彼を殺すなんて, 2565
むしろあの殺人鋼 (Mordstahl) で自分の胸を突き刺したでしょう。
あの時人間らしかった (menschlich) から、私、罰せられるの?
同情 (Mitleid) は罪 (Sünde) なの? — 同情だって!
あんたの剣の犠牲になった他の人たちの時は、
同情とか人間性の声をあんたは聞かなかったの。 2570
その声はなぜ黙ってたの、あのヴァリス人、ほら、
あのひ弱な若者は、あんたに命乞いしてたでしょうに。
ずるい心ね、あんたは永遠の光に嘘ついてる。あんたを
駆り立てたのは同情だなんて柔な (fromme) 声ではなかったわ。

ここでは「見る」(sehen, その過去形 sah, 2564, 原文では 2565) ことが問題にされているが、彼女にそうさせなかったのは前述したように、お互いに個人を隠させ、人間を敵と味方に二分していたあの兜である。ところで、この現実を「見る」という態度はシラーの時代の革新的精神であった。²² 聖書などに書かれている事、教皇が「神はこう望まれている」²³と伝えた内容、上の権力者などが神の代理として公布した法令などを聞いて、そのまま受け入れるのではなく、先ず自分の目で見て事実を確かめ、その奥にある法則や真理を探究することが重視されていた。そのような啓蒙主義的精神が天動説に対して地動説を広め、ドイツの隣国では王権神授説を打ち破るフランス革命を進行させていた。シラーの乙女もここで自分の目で「見た」ことで、あの黒騎士と

の場ではまだはっきりと気付かなかったこと、すなわち自分は神や霊とは違う人間であることを知ったと言えよう。

この彼女の台詞に3回も出てくる「同情」(Mitleid, 原文では 2568, -69, -74) という言葉は、「共に」(mit)「苦しむ」(leiden) という動詞 >mitleiden< の名詞形で、互いの苦しみを理解し、お互いを思いやること、すなわち「同」じ「情」になることであるが、それを妨げたのもあの兜である。しかし兜を脱がされ、脱いだ二人はお互いの素顔を「見る」ことで恋に陥ってしまった。さらに、百合の花を刻印した「剣」(Schwert) の神器は 2566 詩行では「殺人鋼」と改名され、我が身を守りフランスを侵略軍から解放するために携えていた武具が「殺人」(Mord) のための「鋼」(Stahl) と呼ばれ、「鋼」という素材にまで貶められている。²⁴すると、ヨハンナはこれまで盲目的に使ってきた兜と剣という二つの神器の他方の本質、すなわち戦場でお互いを非人間化し合う道具であるという本質を見抜いたと言えよう。

こうして彼女は神の遣いに成りきれなかった人間としての自己を認識し、同時に自己分裂を始める。2567-8 詩行の「(あの時) 人間らしかったから、私、罰せられるの、同情は罪なの」(Und bin ich strafbar, weil ich menschlich war? Ist Mitleid Sünde?) という台詞まで、主語は「私」(ich) であったが、その後は「あなた」(du) にされていることから、彼女の自己分裂は明らかである。分裂して人間の女性となったヨハンナはもう一人の自分に「あなた」呼ばわりで、ライオネル以前のモントゴメリなどの場合は「同情の声も、人間性の声もあなたは」聞かなかったのではないか、その時に聞いていた声はそういう優しい「声」ではなかったはずで、あなたは一貫していない。だから「あなたは永遠の光 (dem ewgen Licht) に嘘をついている」と批判されている。

さて、この台詞に同じヤムプス5脚の6プラス1詩行が続く。

どうして私は彼の目をつい見てしまい、	2575
あの気高い (edel) お顔を見つめてしまったの、	
あなたは見たことで、罪を犯すこと (Verbrechen) になって、	
不幸な女ね! 神さんは盲の道具がご所望で、	
あなたは目をつぶって、やり通さなきゃならなかったのよ、	
あなたが見たらすぐ、神さんの庇護は失せ、	2580
あなたは地獄の罠にひっ捕まっちゃったのよ、	

この後半の詩節でも「見る」ことが問題とされ、ヨハンナは同様に「私」と「あなた」に分裂している。彼を見つめたことで犯したことは日本語に直すと同じ「罪」になってしまうが、原文では前の >Sünde< (2568) から >Verbrechen< (2577) に変化している。前者は神に対する罪で、後者は人間社会が法に従って裁くそれである。²⁵軍令に背いて敵前逃亡するイギリス兵が総大将トルボトに裁かれたと同じように、敵を愛し、逃がすという「罪」(Verbrechen) を犯して

しまったヨハンナはフランス社会によってそれを償わされることになるのだが、同時にそれは「イギリス人は全て殺せ」という神の命に背いた「罪」(Sünde)でもある。問題は彼女の犯した罪をフランス人たちは誰も知らないが、神は知っていると言うことである。彼女はそれゆえ神に対しては途方に暮れ、誰にも打ち明けられない人間社会の罪については胸底にしまい込み、異邦人のような孤立状況を一人で甘受するしかない。そしてこの劇の舞台となっている15世紀では19世紀初頭のシラーの時代より、宗教が社会に及ぼす影響ははるかに大きく、神はいわば日常的に人間社会の中で生きていた。彼女はドンレミという寒村で育った乙女で、大人の社会をまだ知らず、(神の方からすれば、それ故彼女を選んだのであろうが、)とにかく自分は神の遣いとこれまで信じ込んでいたが、ここに至ってようやくこの2つの異質な罪が彼女の中で分化し始めたと言えよう。こうして見ると、ヨハンナは「見た」ことにより、神の遣いだったかつての自分と首尾一貫できない不完全な人間とに自己分裂し、同時に自分が人間の女であることを知り、そしてフランス社会の異端的存在になってしまったと言えよう。

ところで、この詩節にはこの戯曲全体を理解する一つの重要な鍵が隠されているように思われる。それはヨハンナを「あんた」呼ばわりで批判した彼女の一方が2578と2580詩行で2回も使っている「神」が単数形であることである。これまで述べてきたように、顔と個人を隠し、眼前の人間を敵としか見ないようにするあの兜を筆頭として、三種の神器に関わっていたのは複数形の「神々」であった。そして聖母マリーアから神のお告げを伝えられた時、乙女ヨハンナはあの異教の神が宿するという檜の大木の下で眠気をこらえながら祈っていた。それらを考慮すれば、それまでの彼女を「庇護」(2580)していたのは「神」ではなく、「神々」であるべきであろう。それに対して単数の神をもう一人の自分が意識し出したと言うことは、その複数の神々には偽ものが混っていたのだから、どれが真の一柱の神であるのかを探究するのか、またはそれら複数を経る真の神とは何かを究明するのかが問題になろう。即ち、「神はフランス側についているから、お前は神の遣いとして、この世の愛を拒絶し、イギリス人は皆殺しにして、太子に国王としての戴冠をせよ」と言う、あの預言の内容が問題になろう。この内容のどこが真の神によるもので正しく、どこに偽の神が介入し、誤ったものに偽造したのかという問題である。ところが、この預言はそのまま正しいと採れば、彼女はイギリス侵略軍の指揮官ライオネルへの「同情」と「愛」を憎悪に変え、復讐の鬼となって敵の彼を殺して、神とフランス社会に対するあの二つの罪を遅ればせながら償うべきである、という結論も出て来るのではないか。

ところが、周りの祭りの笛の音に包まれて、静かに憂愁に浸って出した彼女の次の結論からは、そういう問題を考慮した痕跡など全く感じられない。先ずは、その彼女の台詞を見てみよう。それはトロフェーウス4脚の8詩行を1詩節とする全4詩節から成っているが、その第1詩節はこう歌われる。

羊を追っていた (fromme) 私の杖よ、あなたを捨てて、 2582
 剣と取り換えなどするんじゃなかったわ。

聖なる櫂の木よ、枝を揺らせて私に
 語りかけてくれなければ良かったのに、2585
 いと高き天の女王様、私の前に現れて
 下さらなかったら良かったのに、
 お取り上げ下さい、あなたから頂いた冠を（Krone）。
 私はそれを受けるに相応しい者ではありません。

この「冠」はあの「兜」を指しているのであろう。これはジプシーの女から村人ベルトランの手へと、そしてヨハンナの頭に納まったのであるが、彼女はそれを神の戦士としての自分に与えられた「冠」と思っていた。²⁶しかし、あの時ライオネルを見て、彼女は人間の女になり、聖母マリアの敵であるイギリス人を愛してしまい、その冠を脱ぎ、乙女の素顔を彼に見せたがため、彼に愛される契機を作ってしまったが故に、自分はその冠に相応しくないから、取り上げてくれと頼んでいる。さらに、あの「剣」も羊飼いの「杖」と交換しなければ良かった、聖母も姿を見せなければ、そしてあの「櫂」もザワザワと枝を揺らせ、そのマリアの声として伝えてくれなければ良かった、そうヨハンナは歌っている。彼女が自己分裂したことについては前述した通りであるが、この台詞の内容は、単数の「神」を盾に彼女を「あんた」呼ばわりで批判したもう一人の彼女に対する、複数の「神々」に依拠した拒否的返答である。この詩節のヨハンナは櫂の大木も、老婆が村人に託したあの兜も、そして彼女の前に現れた聖母マリアも共に、すなわち複数の「神々」として今でも受け入れている。すなわち、この複数の「神々」が一緒になってあの預言を乙女ヨハンナに届けたのであり、その神々の命により、彼女は戦士として戦場に立ち、敵を皆殺しにして来たのである。彼女が聖母マリアからの命を口にする時、この事を考慮に入れておかねばならないだろう。人間はそういう様々なものの全体の中で生きているのであり、櫂の木のざわめきがなければ、神の預言はヨハンナの耳に届かなかったのである。彼女が第3幕第10場でライオネルに止めを刺すことができなくなってしまい、「私は誓いを破ってしまった」(2482)と悲嘆にくれたが、彼女が誓いを立てた相手である聖母マリアはそういう神々の一人で、単独では神の預言を伝える事はできなかったということである。純真無垢なヨハンナはこれまでその預言のどこが真で、どこが偽であるかなどと考えもしなかった。そしてこの時点で、その真偽以前に自分はその預言を託されるには相応しい存在ではないということに気づいたのである。

そして、第2詩節では、

ああ、私は天が開くのを見てしまった、2590
 そしてあの聖女様のかんばせ顔も！
 でも、私の望み（Hoffen）はこの地上にあり、
 決して天上などにはないのです。

あなたは私にこんな恐ろしいこと (Beruf) を
お言い付けにならねばならなかったのですか、 2595
私には、神様に感じやすく (führend) 創って頂いた
この心を無情にすることなど、できませんでした！

この詩節では、乙女は天上と聖母を見てしまったが、その預言には「相応しくない」理由と根拠が歌われている。先ずその理由としては、彼女の望みは天上にではなく、この地上にあることが挙げられ、そしてその根拠を感じやすい心を持っている人間として神に創造されたことに求めている。最後の2詩行で明らかのように、彼女は女の性を抑圧して、神の遣いとして戦って来たが、剣も楯も捨てて命乞いしたモントゴメリに止めを刺した時に同情の気持ちが芽生え、ライオネルに会ったあの時に「感じやすく」創られた本来の心を取り戻し、人間の女に戻ったのであり、そして彼女の「望み」は「天上に」ではなく「この地上に」あることに気付いた。そして、乙女ヨハンナはあの本来憎むべきライオネルに、今は恋い焦がれているのである。

そして次の第3詩節ではその聖母に対して、そのような任務には「罪から自由な」(frei von Sünden, 2599), 「不死の者」(die Unsterblichen, 2002), 「清い者たち」(die Reinen, 2602), すなわち天上の霊たちを選ぶようにと言い、私はそうではない「感じやすく」(fühlen, 2603), 涙もろい「繊細な乙女」(zarte Jungfrau, 2604) で、「弱い心の」(weiche Seele, 2605) 羊飼いとであると、つまり人間であると宣言するに至っている。

ここでの「罪」はもちろん神に対するもので、天上で神に仕える者たちがそれから自由であるのは、彼らの「自然、本性」(Natur) がそう創られているからである。つまり彼らは絶対的な神に一辺倒で、神の命を一貫して果たすだけなので、それ故いつも「清い」ままである。それに対してヨハンナはモントゴメリの場合とは違って、ライオネルに対して神の命に一貫して従うことが出来なかった。彼の顔を見てしまった彼女に突然女という性が頭をもたげ、あの前場での彼女の台詞表現に従えば「男の愛に、この世の情欲という罪深い炎で触れ」(Vgl., S. 411f.) てしまい、ライオネルを殺せなかった。そして神の遣いだと思い込んでいた過去の自分を反省し、ここで自分は天上の者たちと同じにはなれない人間であると自覚したのである。これは彼女の「人間宣言」と言っても良いであろう。

そして最後の第4詩節では、「無邪気に」(schuldlos, 2608) 静かな山の上で羊を追っていた私に「戦闘と屠殺の宿命」(Los der Schlachten, 2606) を担わせ、田舎娘の私を王侯同士の争いに巻き込み、「罪」(Schuld, 2612) を犯させるようにされたが、それは私の「選んだ」(Wahl, 2613) ことではありませんでしたと、自分を神の遣いに選んだ聖母マリアに抗議するまでに至る。

未完

【引用・参考文献】

シラーの『オルレアン乙女』からの引用は Schiller, Werke, Nationalausgabe, Weimar, 1948. B. 9. により、その詩行数は本文中に示す。地の文中での引用では「 」の次に（詩行数）で、地の文と分けた数詩業にわたる引用ではその訳の右側に詩行数を付ける。

- 1 これはその後のフランスによるインドやカナダなどでの植民地獲得のことで、シラーはこれも歴史的事実として知っていた。
- 2 下級貴族の娘エミーリアと結婚する上級貴族のアッピアーニを評して、公爵の侍従マリネルリは第1幕第6場でこう言う、「彼が結んだ契りは不釣り合いですから、彼はもう終わりですよ。良家の門は皆これから彼には閉ざされてしまいますよ」。この台詞の引用箇所、J. G. Lessing, Gesammelte Werke, Aufbau Verl., Berlin u. Weimar 1968, B. 2. S. 248.
- 3 参照、「日本福祉大学研究紀要 現代と文化」（以下「現代と文化」）125号, S. 2. 及びその注1.
- 4 参照、「現代と文化」124号, S. 2f. ヴォルテールとシラーの「乙女」の意味.
- 5 Goethe, Faust, in Goethes Werke in 14 Bdn. Hamburger Ausgabe. 9. Aufl. B. 3. S. 144. Vers. 4596.
- 6 ちなみにシラーのこの作品は1801年に初演され、ゲーテの『ファウスト 第一部』が出版されたのは1806年である。これだけから判断すれば、シラーの方が先であるが、ファウストはゲーテがそれよりずっと以前から長年にわたって断片的に書きつけ、修正し、書き加えて完成した（第二部は1832年）ものであり、この言葉がいつでき上がったのか不明である。シラーがイエーナからゲーテの住むヴァイマルに引っ越してきたのは1779年12月3日で、二人の交際はそれ以前に増して頻繁なものとなり、ワインを飲みながら各自の作品についての意見交流など濃密に行われていた事を考えると、まさにこの交流の成果とも言えよう。もちろん内容は同じでもゲーテの方が簡略で、その言葉が発せられる状況との関係で、より劇的である。
- 7 「建設女」, 「導く女」の「女」に「しゃ」, 「もの」とルビを振ったが、それは原文が「Gründerin<, >Führerin< と女性形で書かれているためである。その直前で「理性」をトルボトは「神の頭から生まれた光輝く娘」と規定しているが、これはギリシア神話の最高神ゼウスの頭から武装して生まれ出た女神アテナを意識してのことであろう。彼女はそのような出生ゆえ戦いの女神とされ、オデュッセウスやヘラクレスらを守護し、さらに知恵や技術などの女神になり、ペリクレスの時代には平和の女神にされた。ここではもちろん「知恵」(Weisheit, Verstand)をつかさどる女神としてトルボトは考えている。さらにドイツ語の「理性」(Vernunft)は女性名詞であることから、「建設女」, 「導く女」と表現しているのであろう。
- 8 執筆者の手元にある9冊をコンマの有無で、それぞれ古い発行年から順次ローマ数字で示す。コンマの無いものは以下4冊。I. J. G. Cotta'sche Buchhandlung. Friedrich von Schiller: sämtliche Werke in 18 Bdn. 1823. B. 7. S. 333. II. Nationalausgabe, Schillers Werke in 42 Bdn. 1948ff. B. 9. S. 257. III. Deutscher Klassiker Verl. Friedrich Schiller in 11 Bdn. 1996. B. 5. S. 228. IV. Carl Hanser Verl. Friedrich Schiller: Sämtliche Werke in 5 Bdn. 2004. B. 2. S. 765. コンマで区切られているものは以下5冊。V. J. G. Cotta'sche Verl. Schillers sämtliche Werke in 10 Bdn. 1844. B. 6. S. 251. VI. J. G. Cotta'sche Verl. Schillers sämtliche Werke in 12 Bdn. 1847. B. 5. S. 303. VII. Verlag der J. G. Cotta'schen Buchhandlung, Schillers sämtliche Werke, Vollständige Ausgabe in 2 Bdn. Stuttgart. 1867 B. 1. S. 514. VIII. J. G. Cotta'sche Verl. Schillers sämtliche Werke, Säkular=Ausgabe in 16 Bdn. 1904. B. 6. S. 290. IX. Bibliographisches Institut AG. Friedrich von Schiller in 5 Bdn. 1935. B. 3. S. 111.
- 9 『シラー名作集』白水社, 1972年6月23日発行, 石川實訳, 289頁.
- 10 『世界文学大系 18 シラー』筑摩書房, 昭和34年11月10日発行内『オルレアン乙女』野島正城訳, 390頁。「ギリシア神話で、知の女神パラス・アテナはジュピター大神の頭から生まれたとされている」(414頁)
- 11 グリムはシラーからの引用に使用した書籍を「1巻本のシラー全集, シュトゥットガルト, 1840年」

(Vgl. Deutsches Wörterbuch von J. und W. Grimm. B. 1. S. LXXXVI) としか記していないが、これは注6で示したVI.と出版地が同じであること、そして1840年にその地にあった書店でシラーの全集を出版できたのはコッタのみであろうから、それと同じものである。相違は発行年に27年の差があることと、グリムでは1巻本であるのに対して全2巻の1であることである。コッタは1840年にシラーの文学作品の全集を出し、その後同じ装丁で彼の哲学・歴史の仕事を加え、2巻本にしたのであろうか。

12 Vgl. NA. B. 9. S. 405f.

13 参照、「現代と文化」第125号14頁。

14 Jacob u. Wilhelm Grimm, Deutsches Wörterbuch, B. 11. S. 145-149.

15 Ibid. B. 2. S. 1520.

16 この原文は >Kurz ist der Abschied für die lange Freundschaft< で、下線部の >kurz< (短い) と >lange< (長い) は対になっている。『これまでの「長い」付き合いに対して (感謝しながら)』、『戦場にすぐ戻りますから「短い」お別れで失礼、そしてあの世に私も間もなく参りますから、それからの長い友情のためにも』と > für < の前置詞句は二重の意味を表しているようである。この同じ対形式でシラーは、この劇を結ぶヨハンナの最後の台詞を >Kurz ist der Schmerz und ewig ist die Freude! < (苦しみは短く、喜びは永遠です) と結んでいる。

17 注5の同書, S. 24. Vers 512f.

18 この彼女の台詞から、先述したように、トルボトが彼女に倒されなかったことは明らかである。先述のトルボトの独白で、彼は「お前が勝って俺が減びねばならんとは」と言っているが、「勝つ」(siegen) は「一般に立ちはだかっている障害物や勢力を道から除去する、又は地上に倒す」(Vgl., J. A. Eberhard: Synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache. Leipzig. Th. Grieben's Verl. 1910. Sansyusha 1983. S. 873. Art. 1243.) で、ヨハンナ軍は立ちはだかっているイギリスの軍勢を邪魔物として、ランスへの行軍道から排除し、戦いの目的を達成するという訳である。ここで「戦闘」と訳した原語 >Schlacht< は「かなり大きな軍隊の間で展開されるもの」で、それほど大規模でない個々人の中での「戦い」も表す >Kampf< とは違う。

19 参照、「現代と文化」125号, S. 18ff. 人間モントゴメリの声と神々の声。特にS. 21.

20 参照、「現代と文化」124号, S. 17. さらに同125号, S. 7. 原文では。Vers 409ff. u. 1087ff.

21 参照, 注8の同書, S. 18ff. 人間モントゴメリの声と神々の声, 特にS. 22. 括弧内の引用, 原文 Vers 1685f.

22 「生氣のない (toten) 記号で脳に刷り込んでいるだけの、生命のない (kalte) 博識を並べた本など父はあまり好みません」。これはゲーテやシラーに大きな影響を与えた啓蒙主義の代表作家レッシング (G. E. Lessing 1729-81) が創作した『賢人ナータン』(Nathan der Weise, 1779, zitiert aus Werken in 10 bdn. Hrsg. v. Paul Rilla, Aufbau-Verl. Berlin u. Weimar 1968. B. 2. S. 467.) の娘レヒャの台詞 (第5幕第6場) である。そしてこれは、自分の目で対象を見ながら、これまでの人類の遺産を批判的に受け継ぎ、より良いものに富まして行くのではなく、他人の知識を理解せず無批判に (= 生氣のない記号で、つまり活字の丸暗記で) 寄せ集めただけの、つまり生命のない博識を批判したものである。この戯曲の内容もそれに相応して、昔の神、奇跡、天使などを持ち出し、「自分の宗教こそが正しい」と言い張る博識を批判している。ユダヤの大商人である父親ナータンは、火事の中から自分を救ってくれたのは天使だと思いついて入っている娘レヒャの迷妄を解こうと、先ず天使ではなく普通の人間であるキリスト教の神殿騎士がそうしたこと、そしてその前にイスラム教のサルタン・サラディンがその彼を赦免していたという事実から出発し、その背後に隠されていた、レヒャと騎士はサラディンの弟の子どもであるという真実に到達する。その筋の展開中で、その三宗教は先ず寛容の精神を前提にして、それぞれが人間らしく真理を追究するよう要請する。

カント (Immanuel Kant 1724-1804) の三大著書が『純粋理性-』『実践理性-』『判断力-』の「批判」であること、そして自然科学は対象の観察を基にして以前の説を批判することからも明らかであ

る。もちろんこの「見る」ことは現在でも重要で、安全「神話」の世界に浸るとか「～村」にこもることは危険である。

- 23 聖地エルサレム回復の十字軍も「神がそれを望まれている」で始まった。
- 24 2569 詩行では「剣」(Schwert, 原文では 2570) とされているのは、まだライオネルと交戦する以前のことで、この台詞を言っているもう一人の彼女は神の命に従ってフランスのために使う武器であると確信していたからである。
- 25 Vgl. Johann August Eberhard: Synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache. Leipzig, Th. Grieben's Verl. 1910. Sansyusya, 1983. S. 502f.
- 26 Vgl., 「1」, 18 頁, Vers. 425ff.

